

文学学術院の将来構想

文化の伝統を未来に開く、知の交差点

時代を先取りした大改革を実現し、たゆまぬ歩みを続けています

1. 2032年（創立150周年時）のイメージ

学術院体制について

学部教育について

- A. 理念と目的
- B. 学部教育の現状
 - (1) 運営体制
 - (2) カリキュラム特徴
 - (3) 充実した科目バリエーションと教員スタッフ
 - (4) 志願者数に見る文化構想学部・文学部

外国語教育について

- A. 英語科目
- B. 基礎外国語科目

文学研究科について

- (1) 教育組織
- (2) 研究組織
- (3) 教育課程・教育活動
- (4) 研究活動

研究体制、総合人文科学研究センターについて

これまでの研究体制から新たな段階へ

教員人事について

開かれた専任教員人事

入学試験について

- A. 学部入試について
- B. 大学院入試について

2. 5年程度の将来像

学部教育について

学部教育の展望

- (1) 論系・コース運営体制の改善
- (2) 夜間時間帯授業の削減
- (3) 教員の担当授業数の適正化
- (4) クォーター制導入の可否

外国語教育について

- A. 英語科目
- B. 基礎外国語科目

- (1) 専門教育との結びつきについて
- (2) カリキュラムの柔軟性について
- (3) 外国語科目選択についての学生サポート
- (4) その他

留学生の受入れ体制について

- A. 受け入れ体制充実の必要性
- B. 教員のすぐれた研究成果の世界への発信——留学生にとって魅力ある研究機関であるために

学部生・大学院生の留学促進について

- A. 現状と課題
- B. アフターケアの充実について
- C. 海外の大学との提携・協力強化
- D. 今後の検討課題

文学研究科について

- A. さらなる発展に向けて
 - (1) 進学志望者数の長期減少傾向
 - (2) 修了者の進路の多様化
 - (3) 専任教員の大学院教育へのコミットのしかたの問題
 - (4) 学横断的な領域への対応
- B. 文学研究科の将来に向けて
 - (1) リーディングプログラム
 - (2) コースの整備
 - (3) カリキュラムの整備
 - (4) 教育体制の整備
 - (5) 総合人文科学研究センターとの関係
 - (6) 学生の動向の把握
- C. 中長期的な展望

研究体制、総合人文科学研究センターについて

- A. 総合人文科学研究センターの目的と活動内容
 - (1) 設立の目的
 - (2) 今後の活動内容（計画）
- B. 総合人文科学研究センターと学内他研究機関・大学附置博物館との連携
 - (1) 学内他研究科との連携について
 - (2) 大学附置博物館との連携について

教員人事ならびに若手研究者問題について

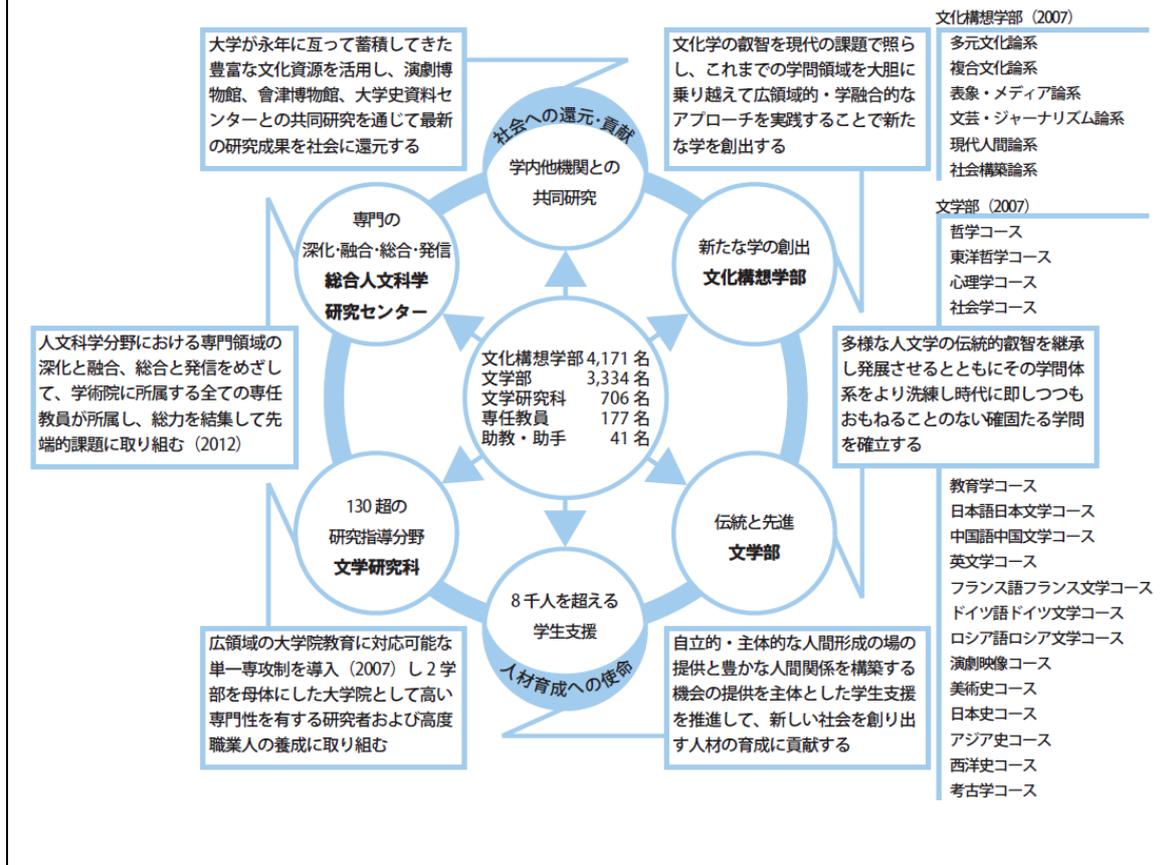
- A. 専任教員人事
 - (1) 長期人事計画に向けて
 - (2) 国際的な人材の拡充
- B. 若手研究者支援・オーバードクター問題

入学試験について

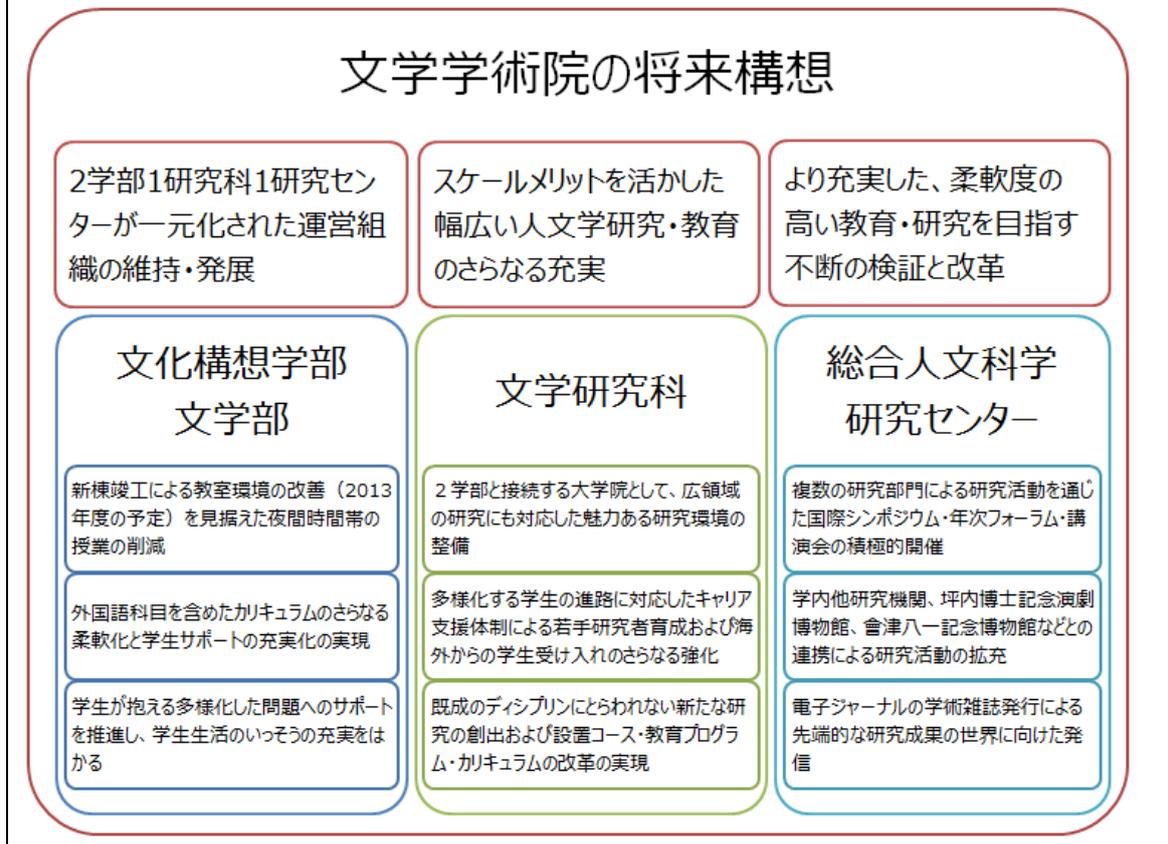
学生生活について

文学学術院のキャンパス環境について

3. 将来イメージ



4. 具体的構想



5. 課題

夜間時間帯授業の削減

33号館低層棟の完成時までには夜間時間帯開講科目の大幅削減を織り込み、時間割基本型の見直しを行う。

教員の担当授業数の適正化

個々の学生に対する親身な教育が行えるようにすると共に、教員の研究時間を確保し、その成果がより質の高い教育として学生に還元される体制を目指す。

クォーター制導入の可否

クォーター制の理念と文学学術院にそれを導入するメリットが明確にされ、基本構想委員会で導入の方向性が示され学術院内の同意が形成されるならば、あらためてカリキュラム委員会において、相応する時間割基本型の策定を行なうことになるであろう。

外国語専任教員の配置について

イタリア語・スペイン語・朝鮮語については、文学学術院内にはいまだ任期付き専任教員が少なく、長期にわたる責任ある教育体制が確立できていない問題点があつと指摘されている。

外国語科目選択についてのサポート

事務的な仕組みと、語学や学問領域に冠する専門的な知識の両方を習得しているようなアドバイザー的なスタッフ配置の可能性が、大学の人事制度が許す範囲内で今後検討されるべきであろう。

留学生の受け入れ体制について

留学生への日本語による発表・論文作成等における支援体制、教員への外国語での教授・指導の支援体制の構築が重要な課題となるだろう。

卒業後の進路支援については、キャリアセンター等との連携を今以上に強化し、就職に関する情報提供や機会提供を積極的に推進する必要がある。

教員のすぐれた研究成果の世界への発信 ——留学生にとって魅力ある研究機関であるために
教員の研究成果を広く海外に発信していく体制を固めていく必要がある。

海外の大学との提携・協力強化

本学が真にグローバルな人材の育成を考えるためには、海外の研究大学を自負する名門大学との提携と協力のさらなる強化が重要である。

大学院修了者の進路多様化への対応

時代の変化に応じて、文学研究科として学生のキャリア支援を行える体制の整備が求められている。

総合人文科学研究センターの活動計画

第二部の「研究体制、総合人文科学研究センターについて」のうち「A. 総合人文科学研究センターの目的と活動内容 2. 今後の活動内容（計画）」を参照

総合人文科学研究センターと学内他研究機関・大学附置博物館との連携

第二部の「研究体制、総合人文科学研究センターについて」のうち「B. 総合人文科学研究センターと学内他研究機関・大学附置博物館との連携」を参照。

学生生活について

文学学術院のキャンパス環境について

32号館の建替えの問題が重要課題である。日本の代表的な人文学の中心たるにふさわしい、受験生にとっても憧れのキャンパスとなるような、イメージの喚起性に富んだ環境の整備が望まれる。

以上